

第2部 トークショー／講演

故郷福島の復興と再生を願って

～何故、なすびはエベレストを目指すのか？～

なすび (タレント、俳優、劇団「なす我儘 (がまま)」主宰、ふくしまあったか観光交流大使、ふくしまDCけんぱく応援団長、なすびと一緒にみんなで東北応援隊！)

【司会】

お待たせいたしました。第2部は、タレントや俳優として御活躍中のなすびさんによるトークショーです。なすびさんは、東日本大震災以降、御出身である福島県の復興と再生を願う応援活動を勢力的に続けられており、現在、あったか福島観光交流大使として、福島の情報発信に努められています。また、福島に元気と勇気、夢と希望をと、エベレスト登頂を目指すなすびの福島パワーアップ的エベレスト登頂計画、エベチャレの敢行や、除染や放射線に関する情報番組『なすびのギモン』の放送、そして、国体の福島県代表の応援団長に就任されるなど、なすびさんらしい多岐にわたる復興支援を行っていらっしゃいます。本日は、被災地への思いや、支援活動を行うきっかけ、活動内容などについてお話しいただきます。それでは、なすびさん、どうぞよろしく願いいたします。



なすびさん

【なすび】

なすびと申します。本日は御来場くださり、本当にありがとうございます。そして、まだまだたくさんの方に残っていただいて、本当に有り難いと思っています。第1部のシンポジウムが終わって、もしかしたら2～3人になってしまうのではないかと、少しは考えてはいたのですが、なんとかたくさんの方に残っていただいて、本当にありがとうございます。

今回、私がなぜこの「震災と人権」をテーマとするシンポジウムに登壇しているのか、疑問に思っている方もいるかと思いますが、本人も疑問に思っています。何故なすびなんだと、もう少し他にいい人がいなかったのかという御意見も、もしかしたらあるかもしれません。私も悩みました。もしかしてこれ、なにかの間違いなのではないのかなど。私も、各方面からいろいろと探りを入れましたところ、どうやら間違いではないと判明しまして、本当に僥倖だなと思いつつも、出身が福島で、復興再生や福島への応援に取り組みせていただいている私の立場として、少しでも多くの皆さんに被災地の現状を知っていただくことにつながればなと思い、この場に立たせていただきました。正直、まだどこかで、これはなにかのドッキリではないかと思っていまして、よきところでダース・ベイダーのテーマ曲^{*注6}が流れてくるのではないかと、そんなようないささか不安もあります。そういった大きなトラブルなどが生じない限りは、私のこれまでの経験を皆さんと共有させていただけれ

*注6：ダース・ベイダーのテーマ曲

正式名称は『帝国のマーチ (ダース・ベイダーのテーマ)』 (英: The Imperial March (Darth Vader's Theme))。ジョン・ウィリアムズ作曲。元々は、映画「スター・ウォーズ」シリーズに登場する人物、ダース・ベイダーが登場する際に流れる挿入曲 (『スター・ウォーズ エピソード5：帝国の逆襲』で初めて使用された)。なすび氏が出演した、日本テレビ系「進め！電波少年」内の企画『電波少年の懸賞生活』(平成10(1998)～平成11(1999)年)の中で、同番組プロデューサーが登場する際に流された。

ばと思っております。お父さま、温かい拍手をありがとうございます。ちなみにサクラで仕込んでいるお父さまではありませんよ。私の思いを何があんでも御静聴してくださいとは言いませんので、多少いびきが聞こえても知らないふりをしますので、御静聴たまわりつつ、小一時間ほど温かい気持ちでお耳を拝借できたらなと思っております。

今日、私は服を着ています^{*注7}し、意外とまじめな話が続きますので、昔の印象が強い方からしますと、少し違和感を感じる場合もあるかもしれませんが、新しいなすびを発見したと、お話を聞いていただけたら幸いです。

まず初めに、なぜ私が「なすび」になったのかをお話しさせていただきます。

最近、インターネットで「なすび」と検索しますと、野菜よりも私のほうが上位に出るようになったようで、多少なりとも私の認知度が上がってきたと思っておりますが、ちなみにこの会場で、私が「なすび」だと認識されている方は、いらっしゃいますか。意外と多いですね、ありがとうございます。お子さんは微動だにできなかったのですが、私のことは分からないと思います。それにしても、小さなお子さんが人権シンポジウムにわざわざ来てくださったことに対しては、うれしいような、恥ずかしいような気持ちでございます。

現在、私は舞台を中心に役者活動を続けていますが、もともと「電波少年」という番組の中で、人は懸賞だけで生きていけるかという無謀な計画に挑戦して、世の中に名前と顔が知られるようになりました。この特徴ある長い顔が、皆さんの印象に残っていると思っておりますが、この長い顔のことで、子どもの頃はいじめられていました。子どもだてらに、顔が長いということはいじめられても、どうしようもないといいますが、本人にとってみては、なんとも、如何ともし難い事態でありました。しかも、父の仕事の都合で小学校が3回変わりましたが、その度に、変な顔の転校生が来たぞといじめられて、厳しい小学校時代、中学校時代を送りました。

そんな中、当時はドリフターズ^{*注8}が流行っていた時代で、『8時だヨ！全員集合』で、志村けんさんや加藤茶さんが面白いことをやって笑いをとっていたのを見ていて、私も子ども心に強いあこがれみたいなものを持っていたことがありました。そこで、試しにこの顔を使って、少し面白いことをやったところ、周りの友達が喜んでくれました。これがきっかけとなり、いじめも少しずつなくなり、友達も増えていきました。人を笑わせたり、楽しませたりすることは、周りも幸せにできるし、何より自分が幸せになることに気がきました。そして、子ども心に、この長い顔を面白いことに使えるということが、私にしかできない強みになるのではないかと思います。この経験が、芸能の世界を目指すきっかけになりました。

逆境をばねに、弱点を逆手に取るということができたことが、現在、私が芸能界で活動している一つの原点になるのですが、同じように、現在どうしてもネガティブなイメージのある福島が、この逆境をばねに、この苦境からいかに脱していくか、弱点を逆手にとって福島を盛り上げようと支援・応援することは、子ども心に抱いた感情や経験が原点となっているのではないかと思います。今振り返ると、私が福島で生まれ育ったことも、福島を応援することも、運命付けられていたのかもしれない。

さて、この中で福島に行ったことがある方はいらっしゃいますか。これも多いですね。私のことを知らなかったその親子さんには、福島には行ったことがあるのですね、ありがとうございます。うれしい限りです。では、福島に行ったことがない方はいらっしゃいますか。ありがとうございます。皆

*注7：私は服を着ています

日本テレビ系「進ぬ！電波少年」内の企画『電波少年的懸賞生活』（平成10（1998）～平成11（1999）年）の中で、なすび氏は、着ていた衣類を没収され、マンションの一室で懸賞に応募するハガキを書き続け、当選し、送られてきた物だけで生活を送っていた。

*注8：ドリフターズ

正式名称は、ザ・ドリフターズ。音楽バンド兼コントグループ。1970～1980年代を中心に、『8時だヨ！全員集合』（TBS系）や『ドリフ大爆笑』（フジテレビ系）などのテレビ番組で活躍、人気を博した。幾度かのメンバーチェンジを経ているが、いかりや長介、加藤茶、志村けん、高木ブー、中本工事がよく知られている。

さんもいろいろと御事情もあるかと思いますが、それはそれでいいと思います。まだ行かれてない方に関しては、今日の話聞いていただいて、少しでも福島に足を運んでいただくきっかけになったらいいなと思います。

私は、最初に紹介があったように、生まれも育ちも福島県です。福島県は、浜通り、中通り、会津と3つの地方があります。これは、大きな通りがあるわけではなくて、太平洋側に面している部分を浜通り、新幹線が通っている平野部を中通り、そして新潟などの県境に接している山あいが会津地方となります。私の父方が浜通りのいわき市で、母方が会津の美里町(旧高田町)の出身です。そして、今実家は中通りの福島市内にありますので、浜通りと会津のハイブリッドで実家が中通りという、3つの地方すべてにゆかりがあります。意外といそうでいない福島県内で珍しいタイプです。同じ県内でも、浜通り、中通り、会津はそれぞれ違った県民性がありますが、私はそれが融合しているといえますか、県内どこに行っても自分のふるさとと言える、そんなアイデンティティ^{*注9}を持った人間です。言い換えれば、私のアイデンティティはすべて福島県にあると言っても過言ではありません。

また、私は「進ぬ！電波少年」出演後に、5年間ほど、レギュラーで福島県のローカル番組をやらせていただきました。その時に、福島県内の市町村、津々浦々、すべて回らせていただいて、下手したら県内2周か3周ぐらいさせていただいて、改めて福島県の広さや四季折々の表情、素敵なものを知りました。地元の方々とも交流を深めさせていただき、皆さんから「あっ、なすび。頑張れよ」「本当になすび、応援してるからね」という温かいお声を掛けていただけて、福島はやっぱいいなあ、いつかしっかり恩返しをしなければいけないなあ、大事にしなきゃ罰が当たるなあと思いながら、生活していました。

そして、平成23(2011)年3月11日、東日本大震災が起きました。震災直後に、芸能関係の多くの方が、大量の支援物資をトラックに積んで被災地に持っていったり、募金をたくさん募って数千万円から億単位のお金を東北に提供したりしたというお話をいくつも聞きました。しかし、私は福島県に思いを持ちながら、この時こそ恩返しをしっかりとしなければいけないと思っていたのですが、震災直後に大きな支援や援助はできませんでした。地元が被災したのに、大きな支援や援助ができなかった自分が、本当に恥ずかしくて、情けなくて、深く後悔しました。そして、原発事故後は、復興まで長い戦いになるなど感じました。

その長い戦いを福島県の皆さんと共に戦い抜いていく中で、震災発生直後に何もできなかったことに後悔し、自分を恥じ、これからはとにかく今やれることは、全部やろうと思いました。長い戦いになる中で、支援が遠のくことがあるかもしれませんが、震災直後に大きな支援・援助ができなかった分、とにかく小さいことでも、地味でも地道でも、あきらめないで続けよう、それが私にしかできない応援だと思いました。

私が最初に被災地福島に入ったのが、平成23(2011)年の4月末、ゴールデンウィークの頃でした。浜通りの相馬に行きましたが、その時、地元でお目にかかった方が、「ああ、なすび君、来てくれたんだ。本当にありがとう」と涙ながらに喜んでくださって、この喜んでくださることが、私にとって大変有り難かったです。その後、津波被害にあったところに行きましたが、あまりの被害の大きさに、無力感といいますか、脱力感に打ちひしがれて、何をしたらいいんだろう、何ができるんだろう、一人でできることなんかたかが知れているなど、完全に目的意識を失ってしまったこともありました。しかし、以前に福島県のローカル番組でお世話になった方が、被災で営んでいた食堂が全て流されてしまい、内陸部の駅前でお弁当屋を始めたと聞いたので、おじゃましました。そこで働いていたお母さんたちが、私の顔を見て、涙ながらに抱きついてきてくれました。そして「わあ、なすび君、本当にありがとうね、来てくれて。ただね、なすび君、ごめん。一緒に撮った写真とか、サイン、全部流されちゃった、ごめんね」とおっしゃってくださいました。皆さんは、命からがら逃げている中

*注9：アイデンティティ (identity)

自己同一性、自我同一性などともいわれる。自らを自分から見ても、また社会から見ても、自分は何者であり、何をなすべきかという意識、概念、自己確信をいう。

で、私との思い出をそれほど大事にしてくれていたことに気がきまして、大きな応援を続けていく心の力になりました。私はもしかしたら小さなことしかできないのかもしれないが、応援してくださる皆さまと一緒にあれば、何かできることは絶対にあるはずだと思いました。とにかく現場に足を向け、赴いて、地元の方々に寄り添って、一緒になって、励ましながら、そこで感じることを、見えたものを、感じたものを、私は蓄積していこうと思いました。

震災から3か月、半年と経った頃、福島と東京とを往復する中で、東京と被災地との温度差を感じるようになりました。東京でも被害はたくさんありましたが、復旧、復興が被災地と比べ早く進んだので、震災があったということを感じる機会が少なくなりました。震災直後、復興を応援する物産展などにおじゃましていたときに、当初はお昼頃には完売してしまうことが続いていたのですが、それが3か月经ち、半年たち、9か月经った頃には、少しずつ物が売れなくなっていき、皆さんの興味、関心が失われていっていると感じました。私が福島の物産展、東北の物産展をやっていると声を上げて、下手したら「えっ、まだやっているの?」といった冷やかな目で通り過ぎていく方も、結構いました。震災から1年も経っていない中で、少しずつ距離が離れ、溝が深まっている感じを得ました。ただ、福島の方たちにしてみると、地元にいるためか、他の地域との温度差や風化のスピードの速さは、実感できません。私は東京と福島を行ったり来たりしているので、溝を埋められるようにしたいと思っていたのですが、直接支援だけでは、その溝はなかなか埋まらないことを知りました。そんな中で、直接支援だけではなく、もしかしたら間接応援も必要ではないかと思うようになりました。間接支援でしたら私が思い描いていた復興に対する思いを実現できるかもしれない、そのように思うことが増えてきました。

その後、とあるきっかけで、平成23(2011)年の夏にお遍路をしました。四国八十八か所を全て歩いて回ったわけではないのですが、福島への復興、東北への復興、それから鎮魂の祈りを込めて17日間掛けて回りました。真夏の時期でしたので、すれ違うお遍路さんは少なく、聞いた話だと夏はお遍路のシーズンオフだったそうです。そんなことも知らず、1日大体5~6時間歩きました。山越えもしました。お遍路で山を歩くこと、自然を感じることも、私の中に経験として残された中、平成23(2011)年の冬を迎えたときに、間接応援として、何かもう一度被災地に、福島に目を向けてもらえる行動、きっかけができないかと思いました。そこで命がけでも、自分のふるさとを守りたいという思いが募ったとき、エベレストに登頂して、そこから世界に向けて、今の福島のことを発信しようと思いました。もしかしたらたくさんの方の応援を募って、多くの方々の思いをもう一度東北に、福島に寄せることができるのではないかと思いました。「なんでなすびがエベレスト?」という情報に、もし誰かがたどり着いてくれたときに、「福島」というワードが少なからず届けば、何かきっかけ作りに、何かの気付きになってくれるのではないかと思い立ちました。

平成24(2012)年の年明けから少しずつエベレスト登頂に向けて本格的に動き出しました。初めて国際山岳ガイドの方に相談をさせていただいたときに、山をなめるなど怒られるのではないかと思いました。ですので、私は強い思いを持って挑戦したいと気持ちを伝えましたら、私の思いを国際山岳ガイドの方がくみ取ってくださいます、私の年齢を聞き、「なんとかなるかもしれないよ」と言ってくれました。エベレストを目指す方には、結構年配の方も多いようでして、それは高額な登山資金も関係するのですが、そういったことも含めて、年齢が若ければ、それなりにチャンスもあるということで、話を真剣に聞いてくれました。

私はそれまで一切本格的な山登りをしたことがありませんでした。だからこそ、あえて未知の領域に挑戦してみようと思いました。それは今、福島の方たちが、原発事故による放射性物質の拡散、そして低線量被曝というこれまで人類の誰も体験したことがない戦いを続けている中で、私が未知の領域に挑戦することで、それが福島の方たちの戦いへの応援になるのではないか、何か応援の呼び水になるのではないかと思いました。私が全くの未経験で世界最高峰のエベレストに登ることができたなら、奇蹟は起こせることを福島の方皆さんにお示しすることになるのではないか。それから、当時外で遊ぶことを禁じられたり、福島で生まれ育っていることに引け目を感じてしまっている福島の子ども

たちに、新しい夢を、新しい希望を持つきっかけになるのではないかと思います、挑戦に向けて動き出しました。

ただし、この計画は、後ろ盾があったわけではないので、すべてにおいてゼロからのスタートでした。登山に関する経験も知識もゼロでした。エベレストは個人で登ろうとすると、大体1,000万円ほど掛かるといわれていますが、この資金もゼロから集めなければなりません。たくさんの方の協力を得なければ、私一人では、どう頑張っても達成することはできない夢です。その夢をかなえるためには、多くの皆さんに応援していただき、応援していただいた分、それを福島県に還元する。私は福島を応援する方と、福島の被災された方との架け橋になれるのではないのかと、そのような思いも持つようになりました。

そして、多くの方々の応援のおかげで、エベレストに挑戦することができました。私がエベレストを目指す少し前、一昨年秋頃に、トレーニングとして訪れたヒマラヤ山脈で、日本テレビの「世界の果てまでイッテQ！」という番組に出演しているイモトアヤコさんと一緒に、マナスルという8,000メートルを超える山を登りました。私はベースキャンプまで一緒に行きました。その時の映像と、これまでエベレストに2回挑戦しましたが、去年福島を出発するときに福島駅で出発式をやっていたときの映像がありますので、私がどのような形で、どのような思いで世界最高峰に挑んだのかを、見ていただければと思います。

(映像)

発言者：よく頑張ったよ。頑張り過ぎだよ。全部の荷物、全部背負って、ポーター使わないで、よくやったよ。

なすび：福島に夢と希望を、元気と勇気をとという奇蹟を起こしたいという、その思いは、結果としては登頂できず、志半ばで。

発言者：そんなことない。

なすび：下ります。

(歌、映像)

なすび：

前半部分は、トレーニングのためにマナスルを訪れた映像で、後半の歌が入っていた部分は、平成25(2013)年の5月に、最初にエベレストに挑戦したときの映像でした。エベレストは8,848メートルなのですが、私が8,700メートルほどで登頂を断念したところから映像が始まります。その後に、去年チャレンジをする出発式を福島駅で行っていただいたときの映像と併せたものです。今の曲は、Shimva^{*注10}さんという女性シンガーの方の曲です。彼女も福島出身なのですが、上京しても夢をかなえられず福島に戻り活動を続けていたのですが、自分の歌がなかなか多くの人に届かないと、そろそろ歌を歌うことをやめようかと思っていた時期に、私と出会い、応援歌(『Re:challenge』(なすびのエベチャレ応援歌))を書いてもらいました。彼女はこの応援歌によって、いろいろな方たちの前で歌を歌う機会が増えたようで、新しい夢を育むきっかけになったそうです。福島で頑張る人の後押しができたことは、私にとってもうれしいことです。

私は、2年連続、エベレストに失敗しました。2回も失敗したら、もう応援してくれる方は誰もいないだろうと思っていました。しかし、失敗したにもかかわらず、今でも少しずつ応援してくれる方が増えています。福島県の方たちからは「なすびに元気をもらったよ」「本当に勇気もらってるよ」「こ

*注10：Shimva (シンバ)

福島県福島市在住のシンガーソングライター。

れからも頑張れよ」と温かい声を掛けてくださることも増えてきました。結果としては、2回失敗したのですが、2回挑戦したことで、少しでも福島の方たちに勇気や希望を与えることができたと思うと、挑戦してよかったと思っています。

私は、平行して直接的な支援も行いました。ボランティアで現地に入り、瓦れきの撤去や側溝の泥出しもしました。ボランティアをしているときは、本名の浜津智明で登録をして、きちんと作業をして、すっとかっこよく帰りたいなと思っていました。他の芸能関係の方でも本名で登録してボランティアをしているとの話も聞いていたので、私も同じようにしようと思っていました。しかし、ボランティアの朝のミーティング時、私は頭にタオル、マスク着用、そして全身かっぱで、長靴を履いていたにもかかわらず、周りが少しざわつき、「あれ、もしかしたらなすびなんじゃないの?」とばれてしまいました。ですが、私が「はい、なすびです」と言ってしまったら、それは私がやりたいこととは違うと思っていたので、あえて気付かないふりをしていました。しかし、隊長さんが来て、「誰さんと誰さんはどこ行って…」といったマッチングの時に、「じゃあ、浜津さんと… あれ、おまえなすびだよ」とみんなの前で言われてしまいました。その時点で、もうかっこよく帰ることはあきらめて、「はい、すみません。なすびです」と返事をしました。隊長さんは「でも、おまえ、本当に来てくれてるんだ。良かった、良かった。それはうれしいよ」と言ってくださり、その時はその隊長さんの計らいで、「やはりおまえは、おまえなりにできること、もちろん普通のボランティアもあるけど、違うこともあるはずだ」と、仮設の小学校に行き、子どもたちと一緒に遊んだり、老人ホームで交流を深めさせていただいたり、防災ラジオに出演し被災地の現状を伝えたりしました。

ボランティアは、適材適所で行っていかねばなりません。子どもや女性に力仕事をしてもらうのは難しいと思います。現地では力仕事のボランティアが偉いわけではありません。心のカウンセリングなどを行っているボランティアも力仕事と同じく重要なボランティアだと思います。福島の場合、まだ瓦れきが散乱し、片付いていない場所、いまだ立ち入ることができない場所があります。震災から3年以上経った今でも、田んぼの上で車が引っくり返っている光景を目にします。そういうことから、力の部分でのボランティアは必要だと思いますが、今、福島が取り組まなければならないのは、心の部分の支援ではないかと思います。福島で頑張っていくための心の栄養が必要だと、私はこのエベレスト挑戦を通して、感じました。

また、震災には震災直接死と関連死がありまして、直接死というのは、地震や津波の被害によってお亡くなりになった方。関連死というのは、震災が起きた後に、福島の場合では、原発事故などもありましたが、仮設住宅で将来に悲観して、自ら命を絶ってしまう方などが含まれます。福島の場合、岩手、宮城と比べると、直接死の割合は非常に少なく、約1,600人というデータが出ていますが、今年の正月の福島民報によると、関連死の死者数が直接死の死者数を超過してしまいました。約1,800の方が関連死と認定され、お亡くなりになっています。宮城や岩手では、関連死は2桁です。ついては、福島の場合は、原発事故などが要因で、生活に対する将来を悲観してしまい、心が弱ってしまう方が多いのかと思います。ですので、福島の方々には心の栄養が必要でして、ぜひ皆さんからも、福島の方々には「応援していますよ」といった声掛けをしていただければと思います。

それと、マスコミで震災のことが取り上げられなくなってしまうと、福島の方たちも不安に感じます。首都圏のマスコミでは、福島関連のニュースが流れると、内容は汚染水の流出や原発の作業がうまくいっていないといったネガティブな情報ばかりです。福島はだめなんだ、福島は厳しい現状なんだなというところだけに、どうしても目が向いてしまいがちになると思います。ですが実際、福島では、県外避難者は4万人を切っていて、県内避難者も含めて12万人です。岩手、宮城と比べると、非常に多い数字ですが、震災前の県民数は203万人ですので、県外避難者が約4万人というのは、全体からすると非常に少ない数字で、200万人近くの方が、福島県で、笑顔を絶やさないように頑張っています。福島のネガティブなニュースばかり目にすると思いますが、誤解なく福島を理解していただきたいなと思っています。

私は一昨年から『なすびのギモン』(<http://nasubinogimon.jp>)という福島県の除染情報番組に出

演させていただきました。福島市内にある私の実家も、既に除染されています。その除染で取り除かれたものの仮置き場を、小さい団地の中ですが、どこにするのか大変もめたと聞いています。このようなことが福島県内の多くのところで起こっているのならば、大変な問題だと思い、除染のことに關しては他人事では決してない思いで、番組に出演させていただきました。エベレストに挑戦したときに、「なんでなすびがエベレストに登ったからって、福島が元気になるんだ」といった批判や批難はたくさんありました。そして、私が除染の情報番組に出演することに対しても、批判や批難があるかと思いましたが、これは仕方がないことかなと思っています。それでも、私は福島県民目線で情報発信をしなければならないと思っています。今、福島で暮らすことに、多くの方が不安や悩みを抱えています。それであれば、私は福島県民目線で、たくさんの人たちと一緒に、今、福島で起こっていることを知らなければいけないし、伝えなければならぬと思っています。実際に、仮置き場にも行きましたし、その除染をしている現場で作業員の方に話も聞きました。どういった形で除染が行われているのか、どういった技術を使って除染をしているのかも、現場で学んできました。そして、避難指定区域の規制解除によって、新しく生活を取り戻そうと頑張っている方たちの話も聞いたりもしています。今、福島はいまだに風評被害が拭えてはいないのですが、お米に關しては、全量、全袋検査をしっかりとやっています、そういった現状に關しても、福島県内ではある程度浸透していても、全国にはまだまだ興味や関心がある方にしか届いていません。そのような中で、行政が福島県の農産物が安心だとどんなに言っても、数値で安全が目に見える形でお伝えできたとしても、消費者の「安心」は主観的な部分になってしまうと思うので、数値による安心とは違う問題なのだと思います。ある方に言われたのですが、「チェルノブイリ^{*注11}のりんごがここにいます」と言われたとき、いまだに一瞬どきっとなさる方がいると思います。チェルノブイリの事故は、約30年前の事故です。それでも、チェルノブイリ=危険なのではないか、というイメージが、僕らの中に残っていることを考えると、原発事故はまだ3年しか経っていないのだなと思いますので、情報発信をしっかりと続けていくということは、重要なことだと私は強く思っています。

そして、第1部のシンポジウムの結論部分でも話にありましたが、「震災がもしなかったら」それにこしたことはないと思います。ただ起きてしまったことをなかったことにすることは、残念ながらできないのです。そして、悔しいのですが、100%元に戻すことも不可能だと思います。私は現在、生き残った、残されたという思いを持ちながら活動しているのですが、私の場合は、福島で生まれ育った、福島に全てのアイデンティティがあることを前面に押し出して、悪目立ちしてでもいいから、やらないよりはやったほうが良いと思っています。とにかくたくさんの応援の形を皆さんに提供することで、福島に元気と勇気、夢と希望を発信し続けていきたいと思っています。今日、皆さんにこうしてお話ししてお会いできているのも、極端な話、震災があったからこそです。ならば、震災があったからこそ、残された私たちは何をしていくのか。福島の場合には、20年、30年では解決できない、100年、200年にわたる問題が残されると思います。どんなバトンを次世代に渡せるのか。そう思ったときに、やはり今、何をするのか。もしかしたら、今しかできないことが絶対あると私は信じて、とにかく多くの試行錯誤を、トライ&エラーを繰り返しながらでも、前向きにいろいろな形で取り組んでいきたいと思っています。

今日、話をお聞きいただいた皆さんに、本当に改めて感謝したいと思います。

最後に、質問コーナーを設けさせていただきます。質問のある方、いらっしゃいますか。

【質問者A】

私は福島に行ったことのない一人です。

*注11：チェルノブイリ

1986（昭和61）年に放射能漏れ事故を起した原子力発電所がある旧ソビエト連邦（現・ウクライナ）の地名。

【なすび】

福島のことなんでも聞いてください。

【質問者A】

私は九州の大分から来ました。

【なすび】

何をしに来たのですか。

【質問者A】

なすびさんに会いに来ました。

【なすび】

またそんな一、喜ばそうと思って。何も出ませんけどね。

【質問者A】

九州の大分では、やはり福島は遠いところというイメージがありまして、なかなか震災のイメージが湧いてきません。ですが、遠い地にいる私たちができることは何かありましたら、お知恵をいただきたいです。

【なすび】

シンポジウムでも話し合われたように、東北の物を支援という形で買っていただいたり、東北に来ていただいたりすることも一つです。ただ、やはり遠い地に住んでいるため、東北に行けない方、それから思いはあるけれど、事情があってなかなか支援できない方もいらっしゃると思います。そこで私は一つ、簡単な方法をお教えています。それは、私を応援してください。これは別に変な意味ではございません。私は、今まで全力で福島の応援活動を続けています。それは私が自分自身にプレッシャーを掛ける意味もあります。もうここまで来たら、引くに引けません。当たり前ですが、私は福島の応援をずうっと続けていきます。福島の方を絶対に裏切らないということを、心に誓って言い続けてきていますので、私を応援していただければ、福島は元気になると思います。私は福島を代表する、福島の生き字引といいますか、福島と世界をつなぐスポークスマンになりたいなと真剣に思っています。ですので、遠隔地からでも応援できる福島応援の形として、なすびを応援するということを、一つ選択肢に入れていただけたら有り難いと思います。

【質問者A】

ありがとうございます。

【なすび】

ありがとうございます。それでは、こちらの女性。

【質問者B】

私は、夫の実家が福島市にあります。

【なすび】

どちらですか、福島市の。

【質問者B】

福島市の阿武隈急行に乗って、卸町駅を降りて、歩いて十数分ぐらいのところですが、時々、帰ることがあるのですが、なすびさんの福島で好きなところについてぜひ聞きたいなと思います。もし、福島ของこういうところに行くと、すごく気持ちがすっきりするよ、というところがあれば、ぜひ教えてくださいたいです。私も福島が好きになりたいと思って、ここに来ていますので。

【なすび】

これは残念ながら、昔ながらの福島の県民性だと思いますが、これが一番だというのは、何もない県なのです。良く言えば、奥ゆかしいのですが、農産物にしても山や湖、海にしてもあるのですが、これが一番というものが何もないのです。ですが、何でもあるというところが、逆に福島県の魅力なのだと思います。一番だというところがない県内を、それぞれの皆さんに探っていただくという、ある意味ゲーム感覚に近い感じで、多くの魅力を発見していただければと思います。浜通り、中通り、会津の3地方にはそれぞれに素晴らしい魅力がありますし、山側には山側、平野部側には平野部側、それから海側には海側の魅力が詰まっています。変な話ですが、浜通りの人の中には、同じ福島に住んでいるのに雪を見たことがない人もいますし、会津には海に行ったことがない人もいますから、地域性が大変富んでいるのだと思います。ちなみに、告知になってしまいますが、明後日に有楽町の東京国際フォーラムで「福島大交流フェア」という、福島県の魅力がぎゅっと詰まったイベントがあります。私も行きますので、いろいろなところでお会いできると思います。足を運んでいただけたら有り難いと思います。そんな優柔不断なお答えでも大丈夫でしょうか。ありがとうございます。

では最後、前の男性の方でよろしいですか。

【質問者C】

こんにちは。

【なすび】

こんにちは。

【質問者C】

(福岡県)北九州市から参りました。

北九州市は、(岩手県)釜石市に市役所職員が行って、常駐して支援活動を行っています。そういう交流もあります。質問は1点あります。

1点は、エベレストを2年間目指されて、登頂できなかった。環境的なものなのか、気象的なものなのか、体調的なものなのか、そういったところを一つ教えていただきたいです。

【なすび】

初めて挑戦した一昨年に関しては、8,700メートルぐらいのところまで行ったのですが、そこから登頂して往復するにも11~13時間掛かり、酸素の残量が厳しいのではないのかとシェルパといわれる現地のガイドから指摘されました。もう1歩でも、もう10メートルでも、もう50メートルでも、100メートルでもいいから先に行かせてほしいと、そのシェルパと相談していたのですが、このときに天候が一気に悪くなってしまって、いわゆるホワイトアウトという、手を伸ばした先も見えないぐらいの吹雪が来てしまいました。そこで、体力の限界と天候の悪化により、断念することになりました。とにかく生きて帰る、生きて下りてくることを、応援してくださった皆さんと約束していたので、そこは本当に苦渋の選択でした。

去年に関しては、日本でも大きくニュースとして報道されていたのですが、5,300メートルぐらいにあるベースキャンプのすぐ上にあるアイスフォールというエベレストでも一番危険だといわれている

る氷河地帯で、大きな雪崩事故が起きました。ヒマラヤ史上でも最大の犠牲者を生んだといわれています。約20名の方がお亡くなりになりました。この事故の影響で、ルートもなくなり、現地のシェルパたちも、今年は死を悼んで中止したほうがいいのではないのか、という話し合いがありました。現地の方々が、事故に対する思いを乗り切れない中で、無理に行っても、けっして誰も喜んだ登頂にはならないだろうという気持ちもありましたし、果たして福島への元気と勇気、夢と希望を持った私が死を踏み越えていくことが、本当に正しいのかという気持ちもありました。すごく考えた中で導き出した結論で、登頂を断念せざるを得なかったというのが、事情になっております。

本日は、まことに御清聴ありがとうございました。以上、なすびでした。

*このトークショー／講演の様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>